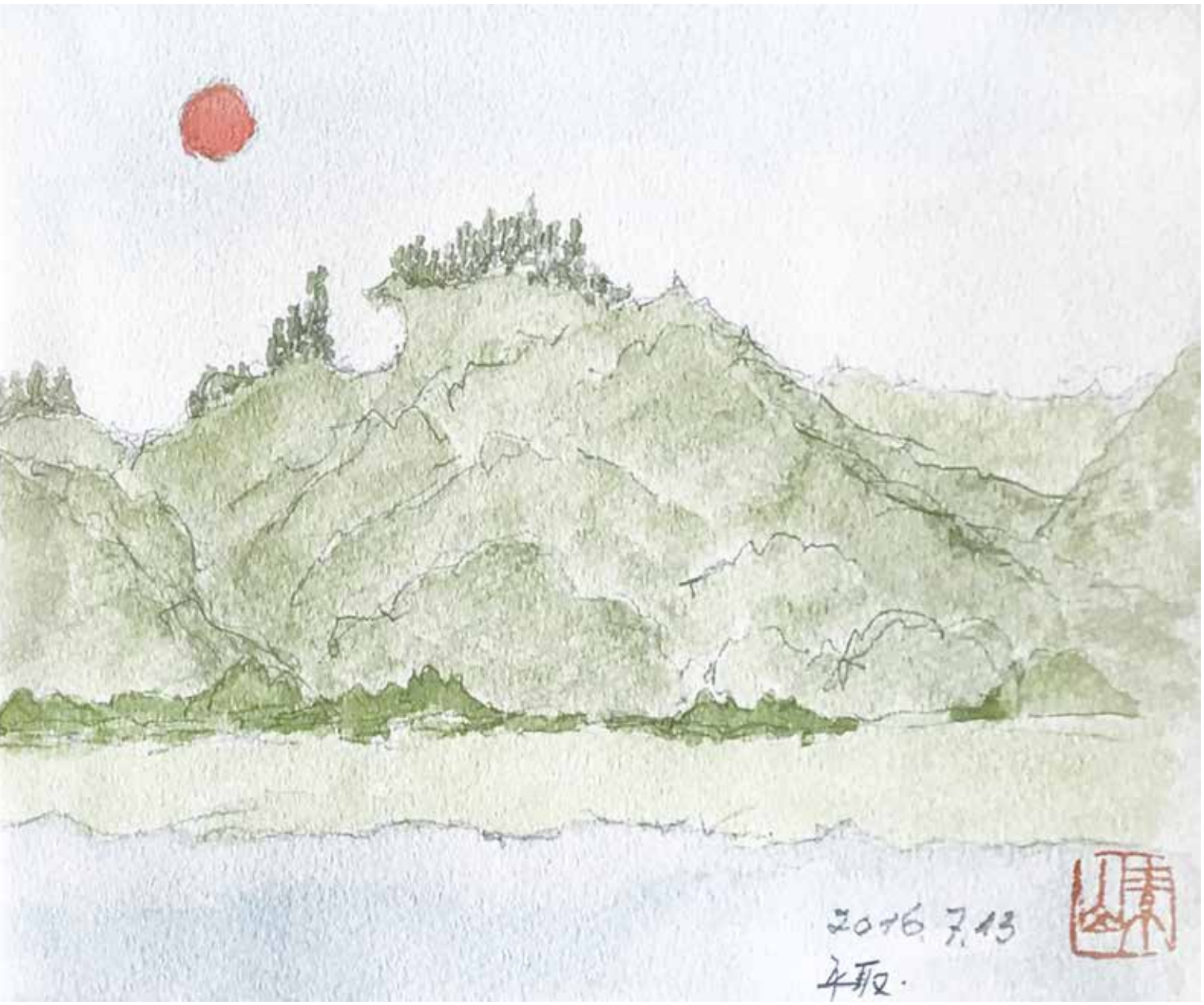
HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | アイヌの伝統を基層にした多文化な景観 ： 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集(全1冊) |
| Citation | アイヌの伝統を基層にした多文化な景観 ： 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 1-35 |
| Issue Date | 2024-03-29 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/92888 |
| Type | report |
| File Information | ronshu_biratori_20240329.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# アイヌの伝統を基層にした多文化な景観

## ― 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集 ―




平取町

北海道大学観光学高等研究センター

## はじめに

## 論集『アイヌの伝統を基層にした多文化な景観』の刊行にあたって

このたび北海道大学観光学高等研究センター（英語略称ＣＡＴＳ）が企画・編集したユニークな論集『アイヌの伝統を基層にした多文化な景観』が冊子として刊行されることになりました。

北大ＣＡＴＳには、平取町が取り組んでいる＜２１世紀・アイヌ文化伝承の森プロジェクト＞を、主に学術の面からご支援いただく委託業務を 2019（令和元）年度以来お願いしてきました。その過程で、沙流川流域の森林をどう保全し活用するかを検討するうえでは、文化的景観の考え方を重視すべきキーコンセプト（概念）の一つに、とのご提言をいただきました。そして、高い専門性に裏付けられた参考にすべき知見が盛り込まれた調査・研究レポートを、毎年度まとめていただきました。それらは、森林に関するプロジェクトを推進し深化させるうえで、とても効果的な役割を果たしました。

また文化的景観については、平取町がすでに 2007（平成 19）年に「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」との名称で国の重要文化的景観として選定申出をし認められ、第２次（2016 年）、第３次（2018 年）と追加選定を受けてきた経緯があります。選定地の広がりは、国内屈指となっています。さらに、「基層」となっている「アイヌの伝統」の深さは、遠くは縄文土器が使われていた時代、あるいはそれ以前にさえさかのぼり、一方では未来に確実に受けつがれていく「新しい文化」との実感も強まりつつある今日このごろです。こうした流れのいったんの集成として、ここ数年は第４次の選定に向けた準備作業を行ってきたのですが、その促進にもご貢献をいただいてきました。北大ＣＡＴＳをはじめ関係の各位に感謝申しあげます。

この論集は、並行し影響を与えあいながら進められてきた関連の諸活動に関わって来られた町内外の方々が、それぞれの専門性や地域に対する思いを短めの論説としてまとめておられます。広さと深さを擁する当地の多文化な景観の見え方や楽しみ方は、これまた実に多様なのだとあらためて思うのです。多少難しいと感じるところがあるのは否めませんが、景観をこう見るべきだとの勉強を無理強いするものではなく、自分なりの受けとめ方・接し方をするための手がかりとして、読みやすいところから始める。そんな感じの冊子として使われると良いのではないでしょうか。当論集を通じて、景観の見方自体も多様になり、いくらか柔らかくもなればと願っています。

2024 年 3 月
平取町長　遠藤 桂一

# 目次


平取町らしいこれからの景観保全 2
麻生美希　同志社女子大学生活科学部人間生活学科

モシリ・エル・ウシ　- カルチュラル・ランドスケープの力 - 4
井上典子　追手門学院大学

沙流川源流の森林の文化的景観としての期待 6
上田裕文・小池辰典　北海道大学ﾒﾃﾞｨｱ・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院、小池孝良　同・農学研究院

アイヌ民族の参画・主導によるヘリテージ・マネジメントをめざして 8
岡田真弓　北海道大学国際広報メディア・観光学院

ペナコリのコタンとイウォロに関する現地調査に参加して 10
川上倫子　株式会社平村建設

初心忘るべからず 12
篠原修　GS デザイン会議

イウォロを通してみる沙流川流域の文化的景観 14
四戸秀和　北海道大学観光学高等研究センター

伝統景観と共生景観　- 平取アイヌ社会における「農村景観」の意味 - 16
瀬川拓郎　札幌大学地域共創学群

平取町の文化的景観について 18
田才雅彦　文化財サポート

地域環境の変化と共に移り変わった景観 20
長野環　平取アイヌ文化保存会

文化的景観の四次選定に向けた取り組み 22
西山徳明　北海道大学観光学高等研究センター

「私的」重要文化的景観論　- そこにしかない風景 - 24
平村徹郎　株式会社平村建設

平取の文化的景観「風土により形成された」から見る 26
三木昇　北ノ森自然伝習所

集落の形態 28
森朋子　札幌市立大学デザイン学部

平取町の文化的景観から得られる学び、楽しみと知見の広がり 30
- 地域の歴史と現在・未来をつなぐゲートウェイ -
柳秀雄　株式会社ノーザンクロス

アイヌの人たちが営み続けてきた集落の今日的景観 32
吉原秀喜　平取町アイヌ施策推進課

# 平取町らしいこれからの景観保全

麻生美希
同志社女子大学生活科学部人間生活学科 准教授

平取町の景観から、私たちは何を読み取ることができるのだろうか。一つは、アイヌの自然を見る眼差しである。様々な地形にアイヌ語地名が付けられ、中でも特徴的な場所は神々の物語の舞台となっている。狩猟・漁労・採集などを行う生活の場である IWOR の広がりを体感でき、チノミシリという祈りの場所もある。それらは、唯一無二とも言える平取町の文化的景観の価値の根幹をなす。もう一つは、近代以降の開拓地としての平取の姿である。それは和人の移住とともに、生産性の向上を目的に自然に積極的に手を加えてきた歴史である。河川沿いの低地を中心に引水できる場所は灌漑用水を整備して造田し、台地や緩傾斜地は畑や牧場として活用した。森は林業の場となり、クロムなどが採掘できる場所では鉱業も発展した。明治・大正には水害に見舞われたが、治水事業により克服し、ダムを整備することで河川水量の調整や飲料水の確保、発電も行われるようになった。

このように、様々な要素に神を見出し自然に人間の暮らしを合わせてきた暮らしの姿と、人間の暮らしを発展させるために自然に手を加えてきた暮らしの姿が一つの景観に混在しているのが平取町の景観である。例えば、宅地でも、コタンの特性を継承する集落型もあれば、近代開拓に典型的な農地に囲まれた散居型も見られる。シマフクロウが棲める森の再生を目指した活動が行われる森もあれば、森林施業が行われる森もある。平取町の景観からは、その相反するとも言える二つの生活のあり方を知ることができる。

では、その景観をどのようにして共有財産として伝えていくべきだろうか。景観保全というと、新たな建造物を周囲の環境と調和させるために、色や高さ、意匠などを制限することだと解釈されることが多い。建造物の集積で成り立つ都市景観には、その手法は最も効果的かもしれない。しかし平取町のような厳しくも豊かな広大な自然の中で、家を建て、農地を耕し、河川や森を活かしてきたことによって形成された景観においては、建造物の形態・意匠以上に、地形や地域の歴史的経緯を尊重した土地の使い方を考えることが重要である。前述のように、ありのままの自然を生かすアイヌの暮らしもあれば、自然に手を加えることで生産性を向上させてきた産業もある。今後、新たな開発行為や建築、土地利用を行う際にそのどちらに重点を置くのか。また、その間でバランスをとるのか。自然と人間との関係性を景観から学んだ上で、地域のこれからの発展を考えることが平取町らしい景観形成なのではないだろうか。それは平取町にとどまらず、全国の文化的景観保全のあり方に一石を投じる可能性がある。なぜならば文化的景観とは、地域の風土と人の暮らしによって形成されるものであり、その関係性を考え続けることこそが、その保全の本質と考えるからである。

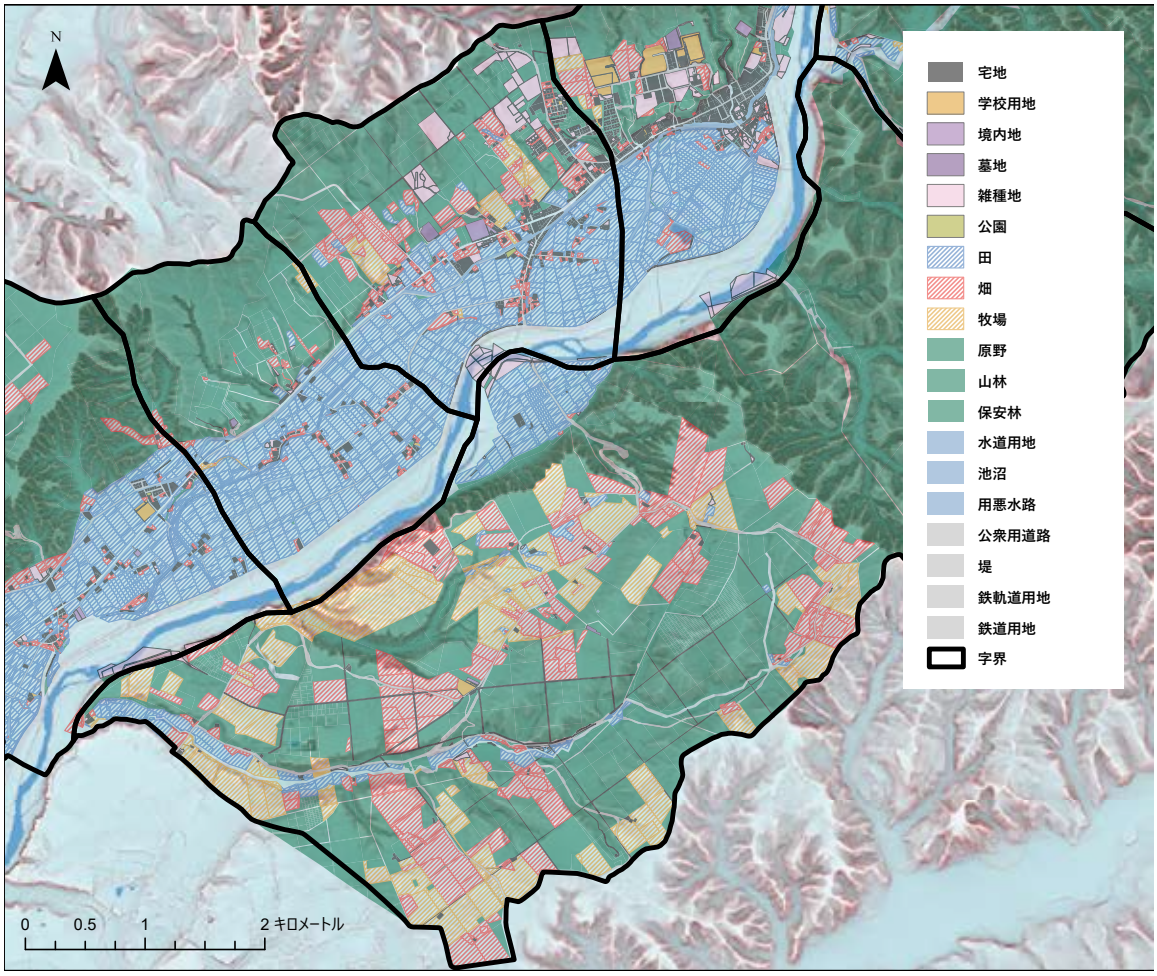



図 1 紫雲古津・去場・荷菜・本町・川向の現況地目（アジア航測株式会社の赤色立体地図をベースに作成）
開拓という営為の中でどのように土地利用が進められてきたのかを読みとることができる。

# モシリ・エル・ウシ

## カルチュラル・ランドスケープの力

井上典子
追手門学院大学 教授

文化財保護法の改正において文化的景観という概念の検討に深く関わった金田章裕は、地理学で使用される文化景観を「大地の上における人間の営為のいわは可視的な表現」（金田2013）であるとしたうえで、そのうち負の遺産ではないものを、世界文化遺産登録基準としての、あるいは文化財保護法に基づく文化的景観であると整理した[1]。これら二つの文化的景観の差異も不明瞭なまま、文化財保護法に基づく文化的景観は現在、その制度運用において生じる様々な検討課題を避けるために、ますます限定的な領域へとその対象を収束しつつあるように見える。こうした日本の動きに対して、世界文化遺産分野に強い発言力を持つイタリア文化省は、カルチュラル・ランドスケープという概念が単なる流行として未整理で広がることに危惧を表明しながらも[2]、人間生活に関連するあらゆる場所に注目が集まる動きを利用し文化遺産の概念拡大を推進した。このイタリアのアプローチは、耕作放棄地、ヴァナキュラな集落、産業衰退地区等を含むすべての景観を対象とした欧州景観条約へと発展した。

筆者の、平取という場所への関わりは30年あまりに及ぶ。最初の出会いは北海道大学農学部教授辻井達一先生の導きによるものであり[3]、環境省等の事業を通じて、チャシやコタンだけでなく、変化し続けるシシリムカを深く体感する機会を得た。その後、釧路、厚岸、別海、中標津、網走と東北海道を知る機会が増え、北の大地が持つ景観の多様性を認識するようになった。これらすべての地域がアイヌ文化に関連しているが、その中で平取が特徴的に示す魅力といえば、やはり「モシリ・エル・ウシ」すなわち川と森の動態に対して継続的に介在しようとするアイヌ文化を軸とした地域の自治であろう[4]。確かにかつてのような大地へのかかわり方ではないが、しかし、変化しながらも、平取では確実に新たなかかわり方が模索されており、その動きは常にカルチュラル・ランドスケープを刷新している。

北海道のカルチュラル・ランドスケープと比較しうる事例として、四万十川の文化的景観がある。シシリムカと同様そこでは、四万十川と、森や人との様々な関係を体感することができる。しかし、四万十川が示す力強さやスケール感とは別に、このカルチュラル・ラ

---

1 金田章裕（2013）「人の歴史が刻んだ大地の遺産―文化的景観」公益社団法人日本地理学会『日本地理学会発表要旨集』341. この中でさらに金田は、従来 Landschaft の訳語であった景観という日本語について「ドイツ語が本来有していた政治的・社会的結合体の意味を失い、いまや英語がもつより視覚的な意味が強く前面に出る結果となっている」と述べている。イタリア文化省が実施した景観調査報告書においてミラノ工科大学の Lionella Scazzosi は、Landschaft に対する paysage や paesaggio について、「構築された場所」の意味が強いと説明している。

2 Scazzozi（ed.）（2000）

3 元財団法人北海道環境財団理事長 https://www.heco-spc.or.jp/ramsar-fund/index.html。2012年にラムサール湿地保全賞（科学部門）を受賞。北イタリアのフェッラーラ低湿地帯で筆者が湿地再生事業の調査を行なっていた際に、辻井先生の指導を受けた。

4 北海道教育委員会は「モシリ　エル　ウシ」を「大地がたわむ」と訳している。https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/5/4/0/0/5/3/_/H19bunkazai-nenpo3.pdf（20240220 確認）ただしインタビューによれば、平取町アイヌ施策推進課は、この概念を重視しつつも、アイヌ語表記・訳については引き続き要検討との見解を示している。

写真１　河岸段丘と峡谷のコントラスト
額平川筋の景観（芽生）© 平取町

写真２　河川合流点と祈りの場の立地
額平川筋の景観（宿種別）© 平取町

ンドスケープをいわゆる「日本的な」枠組において解釈しようとする流れは根強い。

平取のカルチュラル・ランドスケープは、空間的な広がりにおいて、生物多様性や文化的多様性において、暮らしの今日的な変化において、いわゆる「日本的な」という言説に象徴されるある種のイメージを凌駕している。そのまま北極海か、地球のどこか別の場所に立ち現れていても全く不思議ではない。モシリ・エル・ウシというアイヌ語が象徴する生態系と文化のダイナミズムが、多様性と変化に富んだこの地のカルチュラル・ランドスケープの魅力を生み出している。

参考文献

池田忍編（2020）『問いかけるアイヌ・アート』岩波書店

川上勇治（2003）『増補版サルウンクル物語』すずさわ書店

金田章裕（2013）「人の歴史が刻んだ大地の遺産―文化的景観」公益社団法人日本地理学会『日本地理学会発表要旨集』341.

北海道教育庁（2008）「平成 19 年度北海道文化財年報」https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/5/4/0/0/5/3/_/H19bunkazai-nenpo3.pdf

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（2011）『奈良文化財研究所学報 89：四万十川流域文化的景観研究』独立行政法人 国立文化財機構奈良文化財研究所， https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/16669

Scazzosi, L.(ed.) (2000). Politiche e culture del paesaggio. Esperienze internazionali a confronto, Gangemi Editore.

10+1website「いまの地域の変化を許容し、価値を認めること ー文化的景観の課題と可能性」https://www.10plus1.jp/monthly/2019/02/issue-02.php

Yoshihara,H., Inoue,N. (2018). “The Sacred Landscape of Ainu Culture and its Cultural Landscapes: Case Study on the Conservation Strategy in Biratori City, Hokkaido,”in Niglio e Dallari (eds.), Almatourism, Sacred Landscapes: An invaluable Resource between Knowledge and Sustainable Local Tourism Development, University of Bologna, Italy. vol.9, N.8, pp.107-128. https://almatourism.unibo.it/article/view/7725

# 沙流川源流の森林の文化的景観としての期待

上田裕文　北海道大学ﾒﾃﾞｨｱ・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院 准教授
小池辰典　北海道大学ﾒﾃﾞｨｱ・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ研究院 研究員
小池孝良　北海道大学農学研究院 研究員

## はじめに

「アイヌの森の再生」を目指すプロジェクト ( 上田ら 2023）を、アイヌの聖地とされる沙流川源流を主要な研究の場とし、施業指針として適地適木や混交林化を有する“ 森林美学 ”の視点から進めている（新島・村山 1918; 小池 2021)。それにより、平取における森林の文化的資源としての役割を高めるための基礎を論じる。その内容は、世界遺産条約における「文化的景観」の視点に沿うものである（文化庁 2005)。

## 森林美学の視点

「森林美学」とは元来、ポーランド西部 ( 当時はドイツ ) の地主貴族ザーリッシュが 1885 年に提案した「経済林の美学」であった。それを札幌農学校（現、北海道大学）の新島善直がドイツに留学して持ち帰り、その門下生の村山醸造が、自らが魅了された沙流川源流の森林を対象に樹形の美の解析を進めた。これらを基礎に日本の風土に合った森林管理のあり方として日本型の「森林美学」がまとめられた ( 新島・村山 1918)。その内容は、生態系を保全し、野生動物、草、樹木などの自然資本を持続的に子孫に伝える体系である。一方、発祥の地ドイツでは、南部バイエルン地方の森林を対象に「自然林の美学」として展開してきた（小池ら 2021)。

この「森林美学」の指針は、2022 年に採択された COP15 で求められている生物多様性の保全に資する活動という目標のなかで求められている持続的な森林管理と合致する。

## 沙流川流域の文化的景観としての価値の創造

現在、北海道開拓の時期に植樹されたカラマツなど針葉樹の人工林は収穫する時期に入っており ( 来田・小池 2022)、その後の再生を考えねばならない。それに沙流川流域の文化的景観を意識する必要がある。その際、開拓前に広がっておりアイヌの生活の場であった「針広混交林」を目指す。その手法として適地適木・混交林化を施業指針とする「森林美学」が有効であり、それを通じて、流域単位で森林の多機能を発揮できる複相林 ( 図 2) を造成する ( 藤森 2003)。そのモデルには人為攪乱がほぼ無かった場所の自然林を見本とする。この森林の再生にあたり、全国的な課題であるシカの食害対策が必須となった。

図 1　沙流川源流の伐採前の森林の一例　(1973 年当時：鮫島惇一郎氏提供 ) エゾマツ、アカエゾマツ、ダケカンバなどの混交林

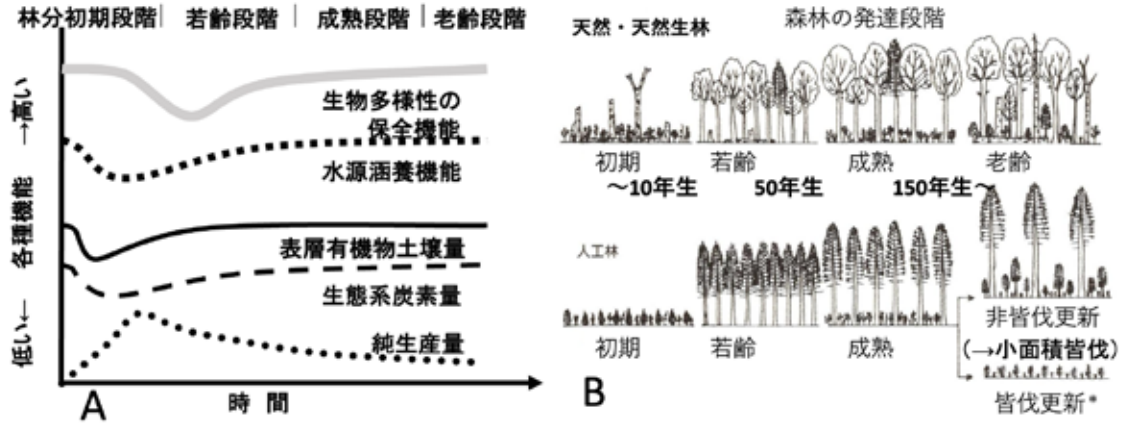



図２ 複相林のイメージ（A）と期待できる多機能の時間的変化（B）…1 つの林分では、多機能を実現できないので流域単位で考える。なお、保健文化機能は目標が多様なので、各発達段階で対応する。Oliver & Larson (1986), 藤森（2003）から作成

森林再生のなかで意識するものとして、森林の発達段階への注目、構成樹種と共生菌類の関連、樹形や光利用特性等を類型化した成林への更新補助法を学ぶ場がある。これらは、平取町全体のエコミュージアム構想におけるサテライトとして位置づけられると考えられる（上田ら 2023）。その際には、特に次のことを意識する。1）異なる植栽地を「展示物」とすること。2）森林生態系や森の世代交代 ( 更新 ) が意識できるようにすること。3）自然資本を巧みに利用してきたアイヌ民族の英知や世界観を学び、時空的情報を得ること（文化庁 2005）。これら 3 点である。長期的なスパンで「アイヌの森の再生」プロセスが文化的資源として活用されることを期待したい。

引用文献

文化庁（2005）日本の文化的景観、同成社

藤森隆郎 (2003) 新しい森林管理、全国林業改良普及協会

来田和人・小池孝良（2020）日本の林木育種の過去・現在・未来、森林遺伝育種 11：8-13

小池孝良 (2021) 森林美学への旅、海青社

新島善直・村山醸造 (1918) 森林美学、成美堂書店

Oliver CD & Larson BA (1986) Forest Stand Dynamics, Update Edition, FES publisher.

上田裕文ら（2023）平取町における長期的森林施業計画の提案 、収録：21 世紀・アイヌ文化伝承の森整備推進事業・調査研究報告書 2022 年度：5-12

# アイヌ民族の参画・主導による
# ヘリテージ・マネジメントをめざして

岡田真弓
北海道大学国際広報メディア・観光学院 准教授

世界遺産リストにおける不均衡の是正や遺産概念の拡大に関する議論が活発化するなか、1992 年に世界遺産の新しい類型として加わった文化的景観は、それまでは評価されにくかった非西欧型文化や民族固有の景観認知などに価値を見出したという点で、遺産概念の多様化に一石を投じた。また先住民族のヘリテージに焦点をしぼれば、文化的景観は先住民族の世界観に基づく自然と人間とのあらゆる関わり―地名、伝承、生業、芸術、信仰、生態系の保全にかかる知識など―を OUV（Outstanding Universal Value：顕著な普遍的価値）として考慮することを可能にしたといえる。最近の登録としては、カナダの４つの先住民コミュニティの伝統的居住地に広がる河川、湖沼、湿地、そして森林とそれらを維持し続けた先住民の知識･技術を含む文化伝統が評価された「ピマチオウィン･アキ」（2018 年登録）や、オーストラリアの先住民族の伝統的居住地にあり、地元のアボリジニ（Gunditjmara）の世界的に大規模かつ最古の養殖システムを含む構成要素が評価された「ブジュ・ビムの文化的景観」（2019 年登録）がある。いずれもこれまでの西洋的価値観に軸足を置く普遍的価値体系から地域･民族固有の価値体系を重視し、OUV の評価につなげた登録といえる。また、構成資産やそれらの所在地域とかかわりのある先住民族が世界遺産登録プロセスや意思決定に参画したり、生態系や自然環境の保全に先住民族の伝統的知識が積極的に取り入れられたりするなど、先住民族の参画・主導によるヘリテージ・マネジメントを実現化するための取組がなされている。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」は、日本の文化財評価にいくつもの変革の兆しをもたらしてきた。ここでは、上述したユネスコ世界遺産における文化的景観と先住民族参画・主導によるヘリテージ・マネジメントの昨今の動向をふまえ、とくにアイヌの認識や知識を踏まえた価値づけと選定エリアで行われる文化実践や生業活動が持つ重要性について触れたい。沙流川流域の文化的景観は、研究者のみならず、平取町出身のアイヌ・萱野茂氏をはじめとする多くの個人、そして平取アイヌ文化保存会といった団体の長年にわたる努力、さらに博物館やアイヌ文化保全対策室の綿密な調査・研究によって収集、保存、継承されてきた有形・無形のヘリテージが多数含まれている。とくに口承やチノミシㇼといったアイヌが周辺環境との相互関係の中でつくりあげてきた精神文化を象徴する要素を多く含んでおり、それがこの文化的景観の強い独自性となっている。また第四次選定では、景観単位として泉靖一が記録した沙流川流域のイウォロ概念を採用し、今日の地域空間のなかでアイヌの認識や知識を盛り込んだ文化的景観の説明を試みている。和民族（和人）の価値体系の中でアイヌのヘリテージを位置づけるのではなく、ヘリテージへのアプローチそのものもアイヌの認識や知識に軸足を置こうとする姿勢は、世界遺産が目指す先住民族とヘリテージのあり方に通じる。くわえて選定エリアでは、アイヌ文化伝承および振興にかかるさまざまなプロジェクトが行われている。そのひとつ、「21 世紀・ア

イヌ文化伝承の森事業」では国有林エリアを中心に森づくりや伝統的狩猟文化の実践が行われ、森林においてアイヌが安心して文化伝承・実践をおこなうこと、そしてそれらの実践が生業として定着することが目指されている。本事業は、森づくり計画や資源の保全管理・活用において平取町アイヌ文化振興公社がハブとなり、地域のアイヌと森林にかかわる様々なステークホルダーが協働しており、今日の森林とアイヌとの結びつきを再生および強化するものである。それはすなわち、これまで以上にアイヌが文化的景観のマネジメントに関わる機会が増えることとなり、ゆくゆくはアイヌ民族が参画・主導していくヘリテージ・マネジメントの展開につながることが期待される。

写真１ アイヌの認識や知識に軸足を置いたヘリテージの価値を伝える努力が継続されている（2022 年文化的景観現地見学会）

写真２ 21 世紀・アイヌ文化伝承の森事業では森づくり等の活動成果をガイドツアーの中で従事者自ら来訪者に伝えている

# ペナコリのコタンとイウォロに関する現地調査に参加して

川上倫子
株式会社平村建設

アイヌ語でイウォロという、伝統的な生活空間を指す言葉があります。そのイウォロに関して、ペナコリと呼ばれる集落とその周辺で調査を行いました。ペナコリは、アイヌ語で“川上の方へ向かう道の所”や“上流の方が高い”と解釈されている地名で、沙流川からの比高約 21 mの河岸段丘上に位置しており、集落は段丘面の微高地にあります。

ペナコリは、文化人類学者の泉靖一氏による「iwor」についての調査 [ 泉靖一：1952] に協力した古老の一人川上サノウク氏、その孫でありアイヌの方々の暮らしを記録した川上勇治氏、伝統的な暮らしや風景を記憶している川奈野一信氏や山岸俊紀氏（以下山岸氏と表記）が暮らしていた場所です。川上両氏が関わる文献資料と、川奈野一信氏と山岸氏の記憶に基づいてまとめられた吉本裕子氏の著書『エカシの記憶を展示する―昭和のアイヌの暮らし―』[ 吉本裕子：2020] を参考に、山岸氏と、川奈野一信氏のご家族でありアイヌ文化の研究をされていた川奈野浩林氏の協力を得て現地調査を行いました。

イウォロは、隣の集落のイウォロとの間に杭を立てる等して各集落が使用権を所有していた生活空間と考えられています。このイウォロの中で、集落で暮らす人々の飲用水、食・衣類・生活民具や家の素材等の大部分を賄っていたと思われます。調査の中では、イウォロの中で、実際に資源調達をどういった場所でどのように行っていたか等の調査を行うことで、近代以降のイウォロの活用と暮らしについて探りました。

まず集落内です。写真 1 は昭和 14 年のペナコリの写真です。この頃はチセ（家）が赤線で示す道路の東（写真では右）にずらっと並んでいます。現在は過疎化が進み人口は減っていますが、写真 2 の通り、道路（赤線）の線形は変わらず、道路の東側に家が数軒並んでいます。萱野茂氏 [ 萱野茂：1973] によると道路を挟んで東側に家、西側にトイレや倉庫があるのが伝統的な集落の様子とされており、写真の辺りには今も道路の東側に家、西側にトイレや倉庫が残る家がありました。誤解の無いように念のため記載しますが、もちろん家屋内に水洗トイレ完備です。倉庫は残念ながら調査の後に解体されました。

山岸氏の案内で集落近くにある「ソラッキ（アイヌ語でソは滝、ラッキは澄む、穏やかな、静かな[1]）」と呼ばれる湧き水に出会いました（写真 3）。川上勇治氏 [ 川上勇治 (b)：1991] によると、ペナコリの集落はもともと沙流川に近い位置にあったのですが、飲用水と農地を求めて現在の地に移動したとされています。集落移転後のペナコリ住民は、井戸が整備されるまで沙流川支流のペナコリナイに流入するこのソラッキの水を飲用水として使用していました。ソラッキ付近はフキ等植物に覆われ、ゴミも散見されましたが、周囲を片付けると、今もきれいな水がこんこんと湧き出ていました。またソラッキから約 70 m上流側には水量の豊富な湧水ポイントがあり、上水道が整備されるまでの間、生活用水として使用され、現在は地域の農家により農業用水として活用されています。

---

1 アイヌ語地名・名称には複数の解釈があり、ここでは『萱野茂のアイヌ語辞典』に依拠

写真１　昭和 14 年のペナコリ
（フォスコ・マライーニ撮影 [ 川上勇治 (a)]）

図２　現在のペナコリ（2021.1.21 撮影）

写真３ ペナコリのソラッキ（2022.6.14 撮影）

写真４ ニカルシコッ（ 2021.1.21 撮影）

上記の他に山では建材・生活道具の素材となる樹木を入手し、薪を取り、山裾で山菜の収穫や炭焼きを行い、シカの通り道にシカを捕らえるための罠を仕掛ける場所があり、沙流川近くの沼では家の床に敷くトマ（敷物）の材料であるガマが育ち、時には衣類や運搬道具を作る木の皮を浸す等したこと、さらに川の近くには畑があったこと等を山岸氏に教えていただきました。資源を採取できる場所には､例えば写真４の辺りが「ニカルシコッ（薪を取る窪み)」と名付けられたように活用方法を示す地名が付けられており、代々その地名を伝えることで継続的に活用してきたことがわかります。

現地調査を通して、イウォロを活用した暮らしは、山の稜線に囲まれたイウォロ内の地形やその土地の状況等による特性を活かし、資源を入手できる場所や時期を把握して、資源を持続的に活用し続ける知識を必要とするものだったことが体感できました。

参考文献

泉靖一（1952)「沙流アイヌの地縁集団におけるＩＷＯＲ」『民俗学研究』
萱野茂（1973)「わが沙流川」『シシリムカのほとりに』日本観光文化研究所
萱野茂（1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂（アイヌ語解釈）
川上勇治 (a)『サル・ウン・クル物語』日本観光文化研究所（背表紙）
川上勇治 (b)（1991)『サルウンクル物語』すずさわ書店
シシリムカアイヌ語地名研究会（2014)『シシリムカアイヌ語地名研究』
吉本裕子（2020)『エカシの記憶を展示する―昭和のアイヌの暮らし―』共同文化社

# 初心忘るべからず

篠原修
GS デザイン会議 代表

景観を旗印にデザインを昭和の終わりから始めて、40 年近くになる。初めは千葉県松戸の広場の橋で、以来橋梁、河川、ダムと続けて来て駅と駅前広場に至った。今だに駅には、長崎駅、名古屋駅、神戸の三宮駅に関わっている。北海道の仕事とはと言うと、昭和 41 年の紋別港実習以来のファン故に残念なのだが、極めて少なく、札幌の創成川と駅前通り、それに旭川。ここでは駅舎と忠別川の広場、鉄道高架に新神楽橋で 20 年以上通った。

出身が建築ではなく土木だったので、デザインの訓練は受けていない。だから、松戸の橋でも、続く島根県津和野の川でも、不安を抱えての恐る恐るの取り組みだった。現在、母校の東大土木では景観の講義もデザイン演習もやっているので、今の学生にそういう不安はないと思う。こうやって越し方を振り返ってみると、当初は思っても見なかった時代になった事に気付かされる。それは、時代は変化するという事である。

デザインを始めたのは昭和の終わりだったと述べたが、景観の勉強を始めたのはもっと早く、昭和 42 年の春だった。どういう時代だったかと言うと、東京オリンピックが昭和 39 年で、7、8 年後には札幌に届くという新幹線が開業したのも昭和 39 年だった。60 年近くも前の事です。筆者が学生だった頃に景観で、俗にいう飯を食っていたのは先輩で助手だった中村良夫さん、ただ 1 人だった。それが今ではどうだろう、大学に限っても、東北大、東大、早稲田、京大、立命館、九大などとなっていて、何人になるのか ( 残念ながら北大にはいない )。これに国交省、環境省、自治体、コンサルタント、設計事務所などを加えれば、何十人になるのか見当もつかない。これも、時代は変化するのだ、ということを示している。

以上に述べた、時代は変化するのだ、という事実から何を教訓とすべきか。随分前になるが、5、6 年下の後輩から次のように言われた事を思い出す。「こんなに隆盛になると思っていたら、やっていればよかった」、この本人は景観に見切りをつけて通産省に入ったのだった。もちろん彼の判断の方が正しく、常識にかなっている。だが、それが正しい道であるか、と言われれば違うと言わざるをいない。以上は景観に例をとっての話だが、変化するのは景観に限ったことではない。何事も変化から逃れることはできないのだ。戦前の陸軍とまでは言わないにしても、戦後の 70 年あまりにしても、花形の産業は戦後すぐの石炭から石油へ、更には今まさに電気へ、鉄道から高速道路へ、さらには航空へ、変化して来たのだ。これからもこのような変化は続くことだろう。

こういう避けられない変化を前にして、どう考えたら悔いのない途を歩めるのか。それは、初心忘るべからず、だと考えて来た。何故、景観の勉強を始めたのか、デザインに不安ながらも取り掛かった時に、何を大切だと考えたのか。時折初心に立ち戻って考える。

ここまで来て、それが平取に結びつくんですか、と疑問に思うかもしれない。だが、川州畑というアイヌの畑を見れば、それはまごうことない水田稲作を始める人間の初心だった事に気づくだろう。また、木の皮を剥いでアッツシを織る女性を見ていれば、それも機織りの初心だった事に思い至ろう。そう、平取に見られるアイヌの生活とその心は、我々

日本人の初心を現してくれているのである。生活するという事は何か、自然と付き合うという事は何かを示唆しているのである。

写真１　アットゥシ織りの高名な織手である貝澤雪子さんの工房

写真２　伝承者育成講座修了式での進藤さん親子
母が持つ木彫盆は息子の綾斗さんが制作
一方のアットゥシ衣装は千賀子さん制作
（工芸伝承館ウレシパで）

写真３･４　川洲畑は、川沿いで洪水がひいたあとの土砂堆積地を使い雑穀などを栽培する古い農法。肥料を用いず除草などの手間をあまりかけない。平取町のアイヌ文化環境保全対策事業では、実際にこの農法を経験・見聞した方々の指導を受けながら栽培試験を行ってきた。

---

※このページの写真と解説文は平取町アイヌ施策推進課による提供。

# イウォロを通してみる沙流川流域の文化的景観

四戸秀和
北海道大学観光学高等研究センター 研究員

イウォロ（IWOR：伝統的生活空間）は、アイヌが暮らしてきた生活の場とそのシステムに関する概念である。文化人類学者の泉靖一は、1951（昭和 26）年に平取に訪れ、調査結果を「沙流アイヌの地縁集団における IWOR(民族学研究第 16 巻 3-4 号 ,1952)」にまとめた。そこには、沙流川流域におけるアイヌの地縁社会が、イウォロという概念をどのように用いていたかの一端が記されている。例えば、動植物の狩採集場と漁場といった場の資源性を捉える概念であったことや、そうした狩猟採集のための制度･規制に関わるものであったこと、また、沙流川流域全体のサルウンクルのイウォロとコタンのイウォロという階層性があったことなど。これらの具体的な記述はこの地のアイヌ文化を理解し文化復興を目指す上でとても重要なものといえるだろう。

沙流川流域では、伝統的生活空間としてのイウォロの現代的復興に向け、エコミュージアムの考え方を取り入れた地域ビジョン「イオルネットワーク構想」（2001）のもと、さまざまな取り組みが行われてきてた。本論集のテーマである文化的景観に関する取り組みにおいては、2007（平成 19）年の一次選定に始まり、現在四次追加選定に向けた作業が進められているが、そこではコタンのイウォロを景観単位として導入することで、これまで個別に捉えられていた河川や森林などの構成要素を沙流川流域の広がり（アイヌのコスモロジー）に位置付けて価値づけすることを試みている。その作業に関わる中で筆者が作成したのが図 1 のコタンのイウォロ復元図であった（図 1）。泉が論文に示された図は、そのまま現代の地図に落とすことが難しかったため、泉の記述をもとにルールを設定し、GIS 上で沙流川流域の集水域（分水嶺）の境界線を下敷きに作図した。したがって､泉の調査したコタンのイウォロを正確に復原したとは言えないのだが、このコタンのイウォロというフレームを通して沙流川流域を見ることで、この地域の特徴的な地形とアイヌ文化に関わる構成要素の立地関係がよりわかりやすく読み取れるようになったと考えられる（図 2）。

河川の氾濫による水害を避けて河岸段丘上に立地したコタン（集落）は、その立地や内部の空間構成を大きく変えずに現代の市街地へと移り代わってきている。コタン周囲の自然資源の広がる狩場（山や川）は、近代の手が入りながらも、アイヌの方々とともに形成された暮らしに根付く土地利用（施業林や農地・牧野）へと変遷してきている。その場の特徴を示すアイヌ語地名は多くの場所で継承され､特に特徴的な様相を呈す地形（山容など）には、アイヌの精神世界を象徴するような伝承が受け継がれている。

このような現代に受け継がれる地形的特徴とアイヌ文化に関わる要素の立地の関係性に見出せるのは、古くからこの地で自然と共に暮らしてきた人々の世界観であり、生活の知恵である。それは、自然資源を持続的に利用していくことを改めて目指す現代社会に対し大きな示唆を与えてくれるだろう。そうした景観が生きたかたちで受け継がれ、そのさらなる現代的な復興が目指されている沙流川流域は、これからの自然と共生する地域社会のひとつのモデルであるように思う。

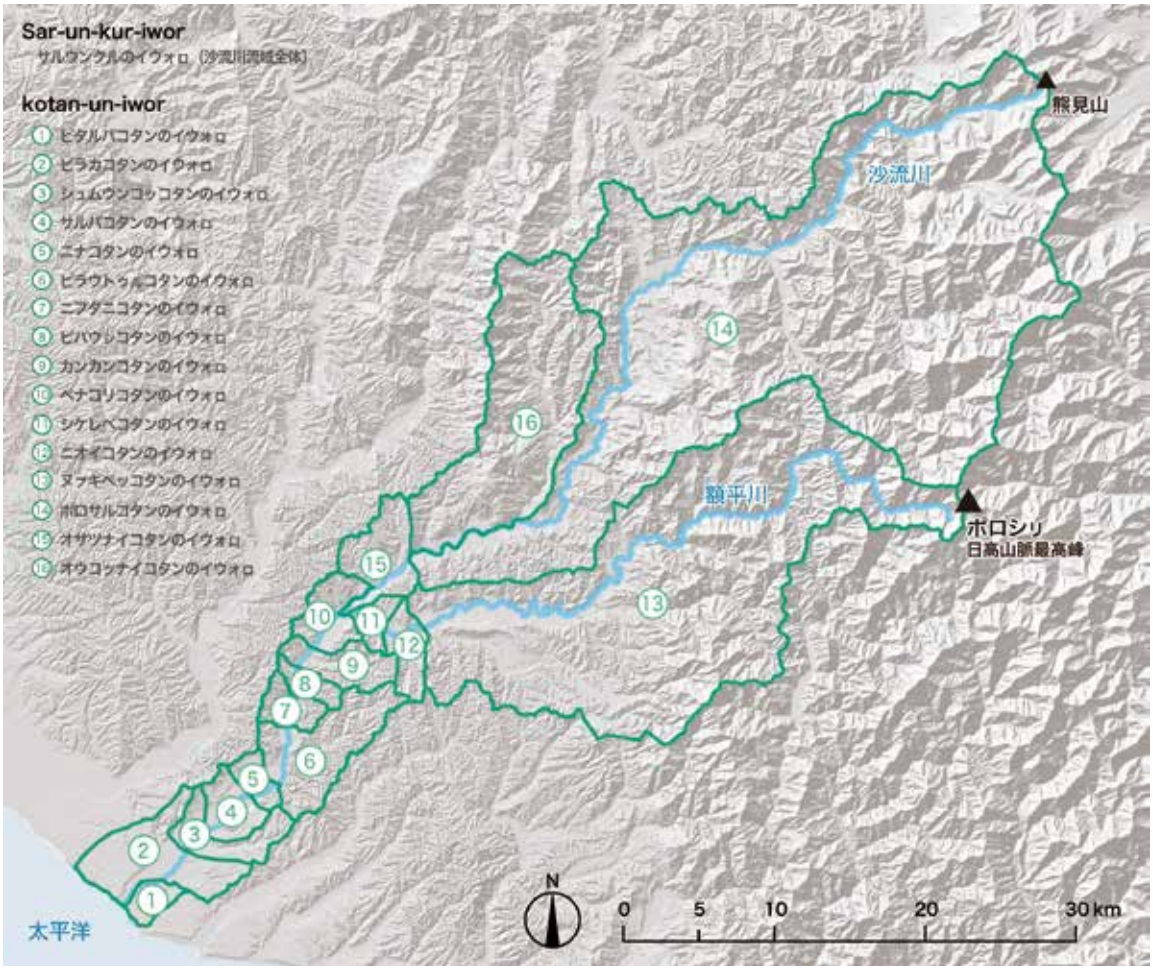



図 1　コタンのイウォロ復元図（DEM データを用いて作成）

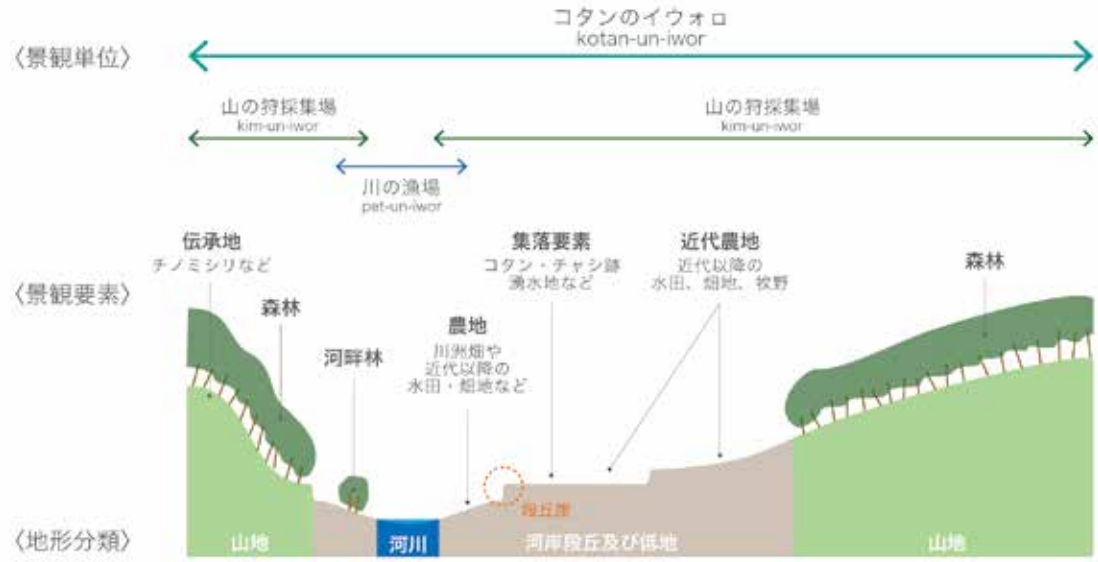



図 2　コタンのイウォロの断面モデル図

# 伝統景観と共生景観

## 平取アイヌ社会における「農村景観」の意味

瀬川拓郎
札幌大学地域共創学群 教授

平取のアイヌ集落は日本の農村風景をおもわせる、とかつて指摘した研究者がいた。実際、近世の平取では農耕が生業に大きな比重を占めていた。

松浦武四郎によれば、幌去周辺は土壌がきわめて肥沃で、雑穀のアワ・ヒエ、根菜のダイコン・カブ・ジャガイモ、果菜のカボチャ・キュウリ・インゲンなどのほかタバコも栽培されおり、脇乙名の倉庫には毎年収穫される雑穀三〇俵が蓄えられていた。これらの作物が食料に占める比重はかなり大きかったはずであり、また栽培の管理もけっして片手間でできるものではなかっただろう。タバコは自給用を超えた商品作物だった可能性もある。

武四郎は、この地域は四方を見通すことができ、「蝦夷第一の開け場所」だったとしている。この「開け場所」の意味は、見渡すかぎり森林が開かれ、耕地が広がっていたということにちがいない。平取はたんに農村的というにとどまらず、「蝦夷第一」とも評される農村そのものの風景をみせていたのである。さらにその景観は、和人と同じように便所を設けていると武四郎が驚いたように、細部においても本州の農村と大きくかわらないものであった。

農耕は、北海道では古代の擦文時代からおこなわれており、コメをのぞく幅広い作物が栽培されていた。とくに内浦湾沿岸、日高、十勝など太平洋沿岸地域や石狩低地帯を中心に畠跡や炭化した雑穀類などがみつかっている。平取の農村景観は、このような農耕伝統のうえに成立したものであり、くわえて少ない積雪と温暖な気候、氾濫がおよびにくい比高差のある段丘面といった複数の自然要因が、この内陸に道内有数の農村景観を生みだしていたのだろう。広大な湿地の広がる下流域は、継続的な農業には不適な環境だったのである。

さらに、日高はすでに古墳時代から和人との交流が活発な地域であり、近世初頭には多くの和人の金掘りも入り込んでいた。このような歴史的条件も、本州的な農村景観のあり方に関わっていたに違いない。平取の農村景観は、古代から続く「伝統景観」であると同時に、和人との「共生景観」ということもできそうだ。

二風谷遺跡など平取の中世集落跡では、道に沿ってわずかな住居が散在し、住居の周囲に世帯ごとの耕地が設けられていたとみられる。しかし、このような住居と耕地がセットになった景観は、たとえば住居群が密集する古代の道東北などには想定しがたい。では、この特異な平取の農村景観は、地域の人びとに独自の文化や世界観をもたらすことにならなかったか。そのことについても考えてみる意義はありそうだ。

写真　ニオイチャシと農村風景

# 平取町の文化的景観について

田才雅彦
文化財サポート 代表

私は個人的に「文化的景観」を「ふるさとの原風景」と捉えていますが､東京の下町で育った私にとってのそれは、あまり自然との関わりがない、ほとんど寅さん映画の世界でした。そんな私が北海道教育庁の職員として、アイヌ文化に関わる名勝「ピリカノカ」と平取町の重要文化的景観選定に関わる仕事をすることになりました。

文化庁記念物課の井上典子調査官の叱咤激励のもと、地元担当の吉原さんと共に、国有林を管理する森林管理局や河川を管理する北海道の河川課などを駆け巡りながら、アイヌ語地名や伝承が残る景観の重要性や、平取和牛・ニシパの恋人（トマト）といった農産物のブランド化など、発掘調査が専門で、およそ地面の下しか見てこなかった私にとって、新鮮で非常に刺激的な日々が続きました。

そもそも「平取」の地名が「ピラウトゥル」(崖の間）であり、そのピラ（崖）こそが祈りの場として大切にされてきたことを知った時、なぜか黄泉比良坂を思い浮かべ、もしかしたらアイヌの伝承は神話に通じるのかも！？などと妄想したことも思い出します。

また、道路中心の生活を送ってきた私にとって、交通路としての川、殊に水面から見上げる視点の重要性を認識したことは、その後のチャシ調査などにも大いに活かされることになりました。

特に「モシリ･エル･ウシ」(山飢饉）と呼ばれる､河川氾濫によるハルニレ林の天然更新が、ササ類の繁茂を抑制し、有用植物を再生させる機能を有し、この地域の人々が、そうした自然現象を有効に活用する術を身に付けていたことには感動しましたし、美しいスズラン畑が、実は牛のおかげで生まれたことなど、多くの学びも得られました。

名勝ピリカノカの指定地にもなった「オキクルミのチャシ及びムイノカ」や「幌尻岳（ポロシリ)、オプシヌプリやウカエロシキなどを舞台とする多様な物語は、地域の特徴を知り尽くし、厳しい自然環境の中からも四季の恵みを存分に得ながら、精一杯生活を楽しんできた人々の心の豊かさを存分に示してくれています。

現在、第四次選定に向けた作業が進められているとのことですが、更に包括的で豊かな文化的景観が形作られ、引き継がれていくよう願っております。

今、道内各地で「文化財保存活用地域計画」の作成が進められ、私も幾つかの協議会委員を務めさせて頂いておりますが、平取町での重要文化的景観選定作業に携われたことが、地域計画作成においても大きな経験値であり財産となっていますので、今後も頂いたその経験を活かし、少しでも各地域のまちづくりに貢献できたらと考えております。

写真１　オキクルミのチャシとムイノカ

写真２　オプシヌプリに落ちる夏至の夕日

写真３　ウカエロシキ

# 地域環境の変化と共に移り変わった景観

長野環
平取アイヌ文化保存会 会長

私が生まれ育った地域、平取街二風谷は、民芸品店が数多くある集落でした。

国道２３７号線が整備されたのは、正確ではありませんが、小学校１年生前後のことでした。その当時は、今のように直線道路ではなく、マンロー坂と呼ばれる曲がりくねった旧道が通学路でした。その当時、気にすることもなかったそんな風景が、今となっては、とても素晴らしい風景だったことに気が付きます。現在は、環境整備という名のもと、イロイロなものが簡単に排除されています。ある人の言葉が印象的で､今も記憶に残っているのが､改変される場所の表土を、工事後に戻せば元のような植生になる｡・・・本当ですか？

両親が、アットゥシ織（正確には、当時はシナ織）で生計を立てていた時期があり、子供のころは、良く糸伸ばしをさせられたことを思い出すことがあります。

祖母も、アットゥシ織やトマ（ござ）編みをしていたのですが、ガマが、トマの材料だと分かったのは、大人になってからでした。祖母が使っていたイテセニ（編み機）に使われていた錘は、石ではなく、乾電池でした。それは、当時ハイカラで便利だったのではないかといまさらながら感じています。それがふだんの暮らしの当たり前の風景だったのです。

家の近くの沼にシキナ（ガマ）が生えているのは珍しくなく、沼に関しても、一つや二つではなかったと記憶しています。

親戚の家の沼も、大きかったと思っていましたが、今見るとそれほどの大きさではないこと、利用されなくなった沼は、ガマすら生えない環境になっていました。現在二風谷ダムの事務所（鵡川沙流川河川事務所）がある場所も､昔は田んぼで､その一部で冬の時期､スケートリンクが作られていて、スケートを滑った記憶があります。対岸、沙流川右岸の、熊の姿岩としてご存じの方も多いペウレプオッカの岩から、下の沼に飛び込んで遊んだという話も聞くと、昔の子供の遊びは、今の私たちの世代では想像もつかないほどワイルド感半端ない事がわかります｡多分､ケガをしない加減が自然と身につく環境だったのだと思います。

子供の頃、川遊びというと、堰堤（二風谷頭首工)、堰堤ではヤツメウナギ捕りを見た事、通学路の途中に流れている沢にドジョウ獲りに行き食べた事もあります。

仕事柄（アイヌ文化保全対策室勤務)、工事による影響を受ける木本･草本類の調査を行っていて、気になることは、チセの屋根や壁材として利用するスプキ（ヨシ)、敷物の素材となるシキナ（ガマ）の自生している箇所が少なくなっているという事です。それらの素材を、工事の際に、水生植物の再生に向け、植生にあった環境を作ってもらえれば増やすことが出来るのではないかと思っていると、それは（思ったところに思ったような植生を作れると思うのは)、人間のエゴというものだという専門家の意見を耳にした。・・・本当ですか？

トマトハウスが並ぶ風景を、今現在の文化的景観と呼ぶのかもしれないが、伝統文化の伝承活動をしている側から言わせてもらえば、それらの素材が育つ環境を再生してこそ、アイヌの文化的景観と言いたいです。ただ、個人の力では、かなうはずもない戯言でしかないように感じられる現実。それならと思って、仕事として携わっている環境下でも、壁に

ぶち当たっている状況です。大きな政治の力なくして、景観の保全・再生も成り立たないのが現状なのだと思い知らされています。

平取地域に関しての文化的景観は、アイヌ文化だけではないが、しかしそれは無くてはならない景観要素の一つとして重視し、特化した整備を進めてもらいたいです。

写真１　1970 年代の我が家のアットゥシ織（シナ織）作業風景

写真２・３　シキナ（ガマ）が「二風谷コタン」の水辺に育っている様子

# 文化的景観の四次選定に向けた取り組み

西山徳明
北海道大学観光学高等研究センター 教授

平取町の『アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観』の重文景選定は、日本に制度ができた最初期(平成19年7月)であり、この際に今日につながる価値付けのストーリーの枠組みが示された。それは、アイヌの人々が畏れ大切にして手をつけなかったポロシリやチノミシリ等の山容や草木からなる自然景観、すなわちユネスコ世界遺産の作業指針が規定する「関連する景観」を基盤・背景とし、そこに継続されてきているアイヌの居住がつくり出したチャシ等の「化石の景観」とコタン等の「有機的に進化する景観」、そして近代開拓による農林業や牧畜の暮らしが造出した生業景観（有機的に進化する景観）が併存し重層するというものである。筆者の理解では、重層するというよりむしろそれらがインテグレートされた価値であり、現代の生業との関係のみでは説明できない価値を評価しようとしているように見える。しかし実際に一次選定時に保存対象としてリストアップされた景観構成要素は、一部の森林と河川、放牧地と単体の学校跡地や歴史的建築物に限られ、人の営みが見える居住地や農地は含まれなかった。

それに続く2次（平成28年3月)、3次（平成30年10月）選定でも、対象は上記要素の一部を充実させる国有林と民有林の選定にとどまった。そのため、次回四次の追加選定に先だって、文化庁より「価値を説明する全ての要素を含むこと」、そして「(範囲としての)平取の文化的景観の最終形を示すこと」が求められた。ただこの間、平取町も手をこまねいていたわけではない。3次選定調査では、河口域と本流上流域（いずれも日高町に属する）を除く沙流川流域の大半を占める平取町全域を将来的に文化的景観に選定することを視野に入れた全町域の景観特性および景観構成要素分布の把握調査をおこなっている。

結論としては、次回四次選定において全町域を選定対象とすることは現実的ではないと判断し、全町調査から得られた知見を用いて、いくつかの考え方を定め、選定候補地を決めた。その考え方の基本は、①上記の「関連する景観」やイヨマンテの「送り」の儀式に代表されるようなアイヌの自然観や世界観（コスモロジー）を理解できる文化的景観のストーリーを示すこと、②こうしたコスモロジーが展開する領域を、平取町内にほぼ収まる、ポロシリの麓に源を発し海に注ぐ「額平川」と「沙流川中・下流域」をつないだ河川の集水域を用いて説明すること、③その領域を構成するイウォロ（アイヌの伝統的な日常生活領域）の概念を現代の地域空間の中で再理解し、景観単位として用いること、④近代開拓以降の農地や牧草地は遷移の過程にあり、その土地利用を固定的に評価することが難しいため、むしろその根底にある河床や河岸段丘等の地形を価値づけて保護することが望ましいとするものであった。調査報告書では、この考えに基づいて価値説明のストーリーを加筆･補強し、その価値の展開する市街地や集落域も含む一定範囲を、現時点における平取町の文化的景観の最終形として示した。現在は関係者の同意を取得するための現地説明会等の段階にきている。

四次選定の結果がどの範囲となるのかは予断を許さないが、上記の全町調査によって、平取町全域の文化的景観としての価値が理解できた。さらには日高町に属する河口域や上流域も含めた本来の沙流川全流域の文化的景観の価値や魅力を地域内外の人たちで共有し、世界にも発信していくことが、アイヌ文化振興の大きな展開につながると筆者は信じている。

写真　荷負本村から見た額平川流域に広がる農地・山林とポロシリ

# 「私的」重要文化的景観論

## そこにしかない風景

平村徹郎
株式会社平村建設 代表取締役

### はじめに

景観や風景の感じ方は、その人の生い立ちや経験に依るところが大きく、それぞれ記憶に刻まれ、印象に残るものだと思います。私は 15 歳までを平取で過ごし 33 歳で帰郷するまで道内･外で生活し、帰郷後まもなく平取町が重要文化的景観に選定される事実を知り、「ある意味の納得」とともに「違和感」を覚えた記憶があります。

私の経験として、西日本の農山村漁村でインフラの計画・設計を行うなかで、多くの風景を眺め、そして文化に触れ、都度、驚きと感動を得ました。

とりわけ印象に残るのは、愛媛県宇和島市の「遊子水荷浦の段畑」で、いくつもの疑問を喚起させ、深く印象に残っています。遊子水荷浦を初めて見た私が発した言葉は、「わ！何これ！」というような感嘆詞で、のちに振り返ると「鮮烈」、「違和感」、「壮観」、「ここにしかない風景だ！」という印象です。それはまだ、重要文化的景観となる前の遊子水荷浦でしたが、その風景と同時に平取が重要文化的景観に選定された事実に、冒頭に記す感情を覚えたのです。

### 重要文化的景観「平取」iwor の私的解釈

平取の重要文化的景観においては、アイヌの生活様式や文化から定義されるイオル (iwor) という概念が、ほかの地域の方々からの理解を難しくしているのかもしれません。

これは漁撈や農耕、そして祭りなど、日本人の多くに共通する情報や既視感ではなく、「狩猟・採取」に基づくアイヌの行動・生活様式と、日本列島に住む多くの人に通底する自然崇拝とは「別の解釈･物語」として独自に近代まで息づいてきたこと、こうした点が冒頭の「違和感」の由来だと考えています。

私が感じるままに誤解を恐れずに本来の定義を補足すると、「人間生活の傍らで、精霊たちがすぐそこに息づいているかのような森や水辺、そうした空気感を現代でも感じられる唯一無二の場所ではないか」、というイメージ（神秘性）です。

### 神秘性・精神性の根源

沙流川流域は背後にポロシㇼが鎮座し、流域の特定の場所からのみ荘厳な雄姿を眺められること、またアイヌによるポロシㇼ崇拝とそのエピソードが流域全体の神秘性（精神性）を湧出させていると思います。そのことはユカㇻ(叙事詩)、ウウェペケレ（言い伝え・昔話）として残され、この中でポロシㇼは登ることを許されない「禁忌の山」であり、その禁を破って

写真１ 平取町芽生地区＜町営牧野とチノミシㇼ＞

しまう人の物語や、山頂付近に暮らすといわれる神々や海洋生物について語られています。

現代ではポロシリは日本百名山として登山者に人気である一方、額平川ルートは渡渉（源流を幾度か横断）しながら山頂を目指すため、その安全は天候に左右され、時には無理をする登山者が命を落とす事実もその神秘性を際立たせ、前述のアイヌの伝承から「カムイの意に反した」と解釈、結び付けることは容易でしょう。

「自然に触れさせて体感させてください」というアイヌ文化特有の精神性はおそらく百名山の中でもひときわ特異な環境・空気感であろうと思います。山菜やサケなどの狩猟・採取においても必要な量だけを分け前として譲り受ける、こうした精神性にも表れていると思います。（現代的解釈だとエコロジー、サステナブルというところでしょうか）

一方、私の原体験としては、新緑や生命の息吹を感じる山河はもちろんですが、厳冬期の早朝に豊糠・芽生の人工物が何一つ見当たらない森林の中で、深々と降り積もる雪の中にひとり身を置くと、「この世界には人間はただ自分ひとりでは…」と錯覚するような感傷と同時に、目に見えない別の息吹のようなものを感じます。こうした空気感・神秘性を感じるのは私だけでしょうか。

## おわりに

写真２は平取の「びらとり」たる所以を今に残す景観の比較です。重要文化的景観一次選定箇所にあたるパンケピラウトゥルナイ，ペンケピラウトゥルナイと四次選定申出が予定されるピラウトゥルコタン（現平取町本町）、また沙流川（シシリムカ）の現在と 136 年前の対比です。左上 1887 年の写真中、〇の位置はピラウトゥルコタンの長であるペンリウクのチセとされ、英国人女性旅行家イザベラ・L・バードが３泊４日にわたり逗留した場所でもあります。バード研究の第一人者である金坂清則京都大学名誉教授は次のように話します。

『バードが来町した 1878 年当時の日本は開国後 20 年ほどで、世界に開かれた場所は一部の港湾都市のみでした。こうしたなか、なぜ平取に多くの英国人をはじめとした外国人が訪れたのでしょうか。彼らは日本の、あるいは北海道の一地域として、たまたま訪れたのではなく、わざわざ平取を目的地として目指していたのです。【世界地史上の平取】であることを理解すべきです。』

『全国に名をはせる「びらとりトマト」をはじめとする農畜産物も加わって一層多様性を増している平取の魅力が、日本国内のみならず世界の人々を引き付けるには新旧の文化的景観が歴史の中で形成されてきたことへの住民意識の認識が不可欠であり、チセの再生は意義があることだと考えます。』

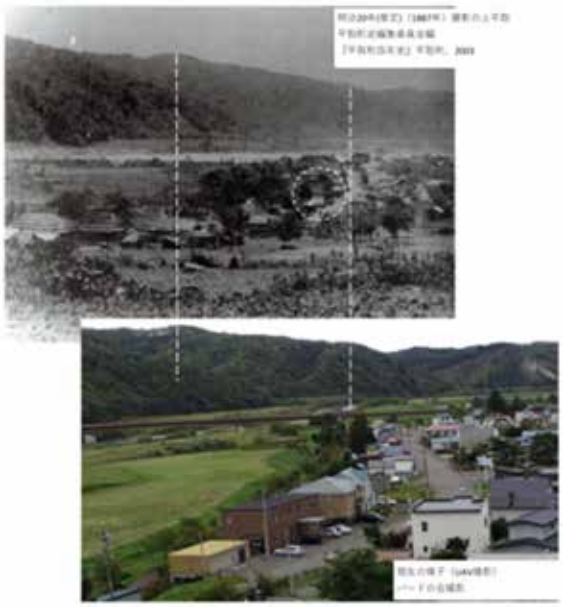


写真２ ピラウトゥルコタンに見る新旧文化的景観

私はイオルの再生やピラウトゥルコタンの再興という文脈の中で、アイヌ文化に理解や共鳴のない人でも、「五感に問う」ような旅の体験を通じて、こうした精神性・神秘性に気づく人が少なくないものと考えています。

# 平取の文化的景観

## 「風土により形成された」から見る

三木昇
北ノ森自然伝習所 主宰

文化的景観は風土により形成されたものであれば、日本の最北に位置する文化的景観である平取の風土は、気候帯で言えば温帯上部と亜寒帯の下部に位置した中に形作られたと解釈できる。また地質的には上流には古生層、下流には第三紀の地層が分布する中であり、気候的には太平洋側に位置して雪の少ない地域の中にある。

周囲の山々は本州とは異なった景観である。本州であるなら里山の慣れ親しんだ杉や檜の植林地は見当たらず、人々の生活を支えた竹細工の竹林も目にすることはない。
雑木林は本州での馴染みのコナラはあるにしても、ミズナラ、シラカンバ、ホオノキ、イタヤカエデ、ハルニレ、ヤチダモといった様々な落葉広葉樹の雑木林が広がる。シラカンバは本州では高標高に行かないとみられない樹種であり、これが景観の中にあるのはいかにも北国らしいものである。

植林はカラマツも多くあるが、本州では見られないトドマツの木がある。これは信州や東北などの山地上部にあるシラビソやオオシラビソの仲間で、それが里山に植林されている。この事も日本全体からみれば平取の景観を特徴づけるものとなっている。

こうした植生の特性を持つ中で、その景観構成要素のさまざまな樹木を使ってアイヌ民族は道具を作り生活してきた。また、北海道の河原に多いハルニレは火という生活上最も重要なものの火の神様と深い関わりがあるのも、これも北国の文化らしい。シラカンバなど樺類の樹皮を使った容器、灯りの用具、河原で採取できるトドマツの樹脂をためた枝を熾火にするというのも、当地の北国の植生からきたものである。

このような北国の植生の中に、北国の動物たちがくらし、アイヌ伝承を生み出した。神であるヒグマ、食料として重要なエゾシカの生息。これらは北国の山地景観の中に暮らしているもので、景観と結びついた生き物たちである。また、北国の特質の一つとして鷲の存在がある。北海道よりさらに北で繁殖する鷲たちが、冬季に寒さを避けて飛来する。これがヒントになったとおもわれるアイヌの怪鳥伝説がある。羽を広げると 2m を超える大きな鷲が冬季間この地に飛来し、川沿いの大木に止まるというのも北国らしい景観である。

写真 1　全体風景
背後は原初的と思われる針広混交林の植生を残し、その中に伝説を生んだ岩壁が配されている。中段の緑は北方樹種のトドマツの植林地であり、周囲は用材や薪炭材として利用されてきた雑木林が見える。また手前のダム湖は現代の景観である。

地質からすると平取の大地は堆積岩を基盤としている。その中でも、アイヌの暮らした地域に分布する礫岩は浸食に強く独特の岩壁、岩峰を作り、幾

写真２　鷲の止まる冬の風景と鷲
冬季には鷲のいる景観が今もある。中央の木は河川改修においてアイヌ文化を尊重する施工により残置された大木である。平取の河川工事は文化を配慮することになっている。　鷲は翼を広げると 2m を超える。

つかは祈りの対象となっている。またその形象が伝説を生んでいるのもこの地の特質である。さらに堆積岩地帯の砂岩や泥岩の風化した土砂は谷間に押し出され、広い河原と段丘を作った。段丘は人々の暮らす集落や畑地となり、広い河原は川洲畑と呼ばれるエジプトの洪水に見られるような、雪解けとともに現れる広大な川洲の適地利用による雑穀畑の文化を作り出した。この川洲は開拓とともに堤防と用水路により水田化、あるいは牧草地化して新たな生業の景観となった。

近代になりアイヌ民族は和人の入植と同化政策という中に翻弄されながら、農業者となり水田や畑の耕作、牧畜という生業を営み今日に至っている。また森林の伐採、植林といった林業にも従事するもの、河原の転石の庭石利用の造園業に従事するものなど近代の生業を営みながら平取の景観を作り上げてきた。これらの景観の中でアイヌ文化を伝承する営みが続けられているのも平取の特質である。

写真３　鮭を採食する鳥
遡上し産卵後の鮭とそれをねらう鳥の姿はアイヌ伝承となっている。

写真４　川州
春の河川敷、川の氾濫によりできた川洲はかつて雑穀畑に利用されることもあった。川洲には柳林が自然にできる。( 中段の緑の部分 )。柳は祈りの道具である幣の作成ために欠く事のできない樹木である。細い物しか利用されることはないので不定期に氾濫する川により常に細く多量の柳があることが、アイヌ文化にとって重要である。

写真５　開拓牧野
牧場の中にある巨木。近代の生業である牧畜の様子。当初は軍馬生産の場であり、今はブランド肉牛の産地である。中央は日陰のための日陰樹と言われる軍馬生産時代からの牧畜技術である。その番人としてアイヌの果たした役割が伝承されている。

# 集落の形態

森朋子
札幌市立大学デザイン学部 准教授

## コタン

コタンは、アイヌ語で「むら」を示します。アイヌ民族は狩猟採集を生業とし、その居住地をコタンと呼び[1]、アイヌ語には国や郡といった社会の単位組織を指す言葉がないことから、アイヌ民族にとってコタンが唯一の社会単位とされています。すなわちコタンは、日本語の「むら」と同様に社会組織の単位であり居住地も意味しています。

一方、コタンは「アイヌ文化の中でこの社会組織に関する分野は一番研究が遅れてきたといってよい」[2]と言われ、その空間的解明は、地図資料を頼りに手探りで見ていく必要があります。

## コタンの変遷

高倉は、コタンをその成因により、自然部落（近世以前の狩猟採集生活を基礎に血族団体にて水辺に自然発生した集落）、強制部落（和人による支配・干渉を受け２つ以上の血縁で組成された集落）、保護部落（1899 年北海道旧土人保護法（以下保護法）により給与された給与地内の集落）に分類して時代的変遷を示しました（表１）[3]。正確な図面をもとに分析ができるのは給与地図以降であり、保護部落（以降、アイヌ集落）からと言えます。

表１ コタンの変遷（高倉[3]参照、集落平面[4]加えて筆者作成）

| | | 自然部落 | 強制部落 | 保護部落（「アイヌ集落」←筆者） |
|---|---|---|---|---|
| 発生要因 | | 自然発生 | 和人支配・干渉による | 勧農方針にて移転・合併 |
| 集落社会 | 社会組織 | 血族団体 | ２以上血縁混在で複雑化 | 血縁遠い異分子と和人 |
| | 組織の長 | 族長 | 乙名（和人より任命） | 個人的実力・経済力による |
| 集落立地 | | 交通に便利な水辺、特に川や沼岸の高所 | 海岸（和人出張所、会所元）＋川沿（本村） | 給与地（「従来開墾地」もしくは「殖民地の区画内」） |
| 建物配置 | | 「でたらめに密集」、水源の山々に棲む神に捧げる幣所に面す窓が家の正座に同方向を向く | 記載無 | 「家は相変わらず密集的」、彼等の習性による所も多いらしい |
| 集落平面 | | 狩猟採集民「線形集落（注8）」（「コタン」←筆者）→ → → → | | ― |

## アイヌ集落の形態

居住地は飲み水が得られた洪水の恐れがない乾燥地で、川や沢の合流点以外に場所が選ばれました。また、集落内の住居配列は、宗教的信仰を基にチセ長軸上の「神窓」が川の源流方向に向くよう配置され、狩猟採集民集落の「線形集落」に分類されます[4]。高倉も自然部落に同じ指摘をし、さらに建物が「出鱈目に密集」した要因を「通路に縛られない」こととします[3]。

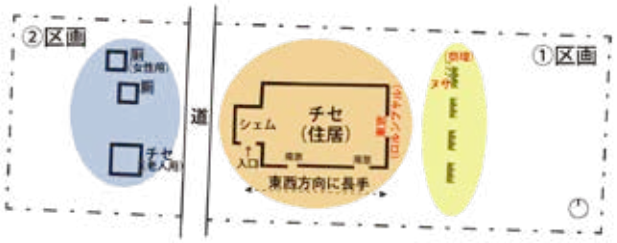



図１　各居住地(一戸あたり)の家屋配置と給与区画(基本型)

図２　二風谷村の土地利用・区画形状分類別分析図

一方アイヌ集落は、鷹部屋がチセは道路の東側に同型（間口四間・奥行三間位）で何れも祭壇が並び道路西側に便所が並ぶ往時の面影を「得異な景観」[5]と表した通り、同型住居とその構成・配置がアイヌ集落の特徴であったことを示唆しています。給与地図に参照すると、各居住地の家屋は道路を挟む一対２区画に信仰方向に配置（図１）され、集落として見ると、道沿いに居住地が連なる「列状路村」の集住形式で「沿道型」を示します（図２）。

アイヌ集落は、信仰方向にチセの長軸を向けた居住空間構成を継承してその特徴を示す一方、保護法によるアイヌ民族への勧農施策によって、土地生産性を重視した農地確保と集住の方針に影響され、沙流川流域地域を南北に貫く道をチセ・便所間に挟む「列状路村」形式にて次第に集住し、「沿道型」の平面形態を成した結果、各居住地は道を挟む「一対２区画」を基本とする給与区画となったと考えられます。

本稿は拙稿（森朋子：「給与地図」に見るアイヌ集落の居住地形成原理に関する考察，二風谷村における各居住地の特性と集落社会の関係性に着目して，日本建築学会計画系論文集，88(809),pp.2151-2159,2023.7）を一部抜粋したものです。

---

補注

1 コタンは、家１軒でも仮住居の場所でもコタンという。知里真志保：地名アイヌ語小辞典 ( 復刻版 ), 北海道出版企画センター ,P.50,1984（初版 1956 年）

2 アイヌ民族博物館監修：増補･改訂アイヌ文化の基礎知識 ,P.180, 草風館 ,2018　アイヌ民族の「むらのしくみ」に関し、いわゆる一般的な説明から。

3 高倉新一郎「アイヌ部落の変遷」, 日本社会学会年報 ,7,PP.130-163,1940

4 渡辺仁：狩猟採集民集落平面形の体系的分類，社会生態学的・進化的研究，国立民族学博物館研究報告，11(2),PP.489-541,1986 渡辺は、狩猟採集民と非近代的農耕民の住居の平面的配列パターンにより、集落平面を５類（群団形、線形、四角形、沿道型、格子形）に分類し、狩猟採集民としてのアイヌ民族の集落を「線形集落」に位置付けた。

5 鷹部屋福平：アイヌ住居の研究（続き）, 日高平取方面に於ける地方性 , 北方文化研究報告 ,5,PP.103-142,1941 の P.107 に第一図「日高国沙流郡二風谷村旧土人給与地 明治 35 年 4 月調査」手書きの図面が掲載されている。

# 平取町の文化的景観から得られる学び、楽しみと知見の広がり

## 地域の歴史と現在・未来をつなぐゲートウェイ

柳秀雄
株式会社ノーザンクロス アドバイザー

1878（明治 11）年に英国の女性旅行家イザベラ・バード（以下、バード）は、現在の日高町富川にて沙流川を渡り、当時の佐瑠太村（現在の富川）にてオーストリアの外交官・考古学者のハインリヒ・フォン・シーボルトに会い、当時のピラウトゥルコタン（現在の平取町本町）の長（首長）ペンリウク翁を紹介されました。佐瑠太にはコタンもありましたが、当時、仙台地方の士族の開拓地として明治初期から和人の入植が進んでいました。

その後、バードはピラウトゥルコタンのペンリウク翁のチセ（家）に滞在し、バードは、滞在中にアイヌの女性を看病したお礼として、アイヌの伝承地ハヨピラの中腹にあった義経神社の前身となる祠に参詣することをペンリウク翁から許可されたことや、アイヌの人々の暮らしを著書『日本奥地紀行』に書き記しました。当時のピラウトゥルコタンの様子をモデルとして再現したといわれているジオラマが民族共生象徴空間（ウポポイ）にある国立アイヌ民族博物館に常設展示されています。

平取町は、全国で三番目、北海道で唯一、国の文化財の一つである重要文化的景観に 2007（平成 19）年に選定されており、2018（平成 30）年度以降、四次選定申出のための調査が行われてきました。ピラウトゥルコタンの当時の道路やチセのあった場所と、現在の平取町本町の上平取（沙流川上流側）の街並みとの関係について、平取町立二風谷アイヌ文化博物館の協力やイザベラ・バードの道を辿る会など地域住民の参加も得ながら 2018 年に現地調査を行い、当時のチセは現代的な住宅の街並みに変化したものの、かつてのコタンの中心を通っていた道路と現在の平取町本町を貫通する道道 80 号（旧国道 237 号）の線形がほぼ変わらないことを再確認することができました。明治時代に撮影されたコタンの写真や古い地図を見ながら、実際に自分たちの足と目で確認することにより歴史を肌で感じるとともに現代との連続性にワクワクした記憶があります。

写真 1 国立アイヌ民族博物館におけるコタンのジオラマ

写真２ 平取町本町上平取での当時のピラウトゥルコタンに関する現地調査（2018 年 12 月）

2022（令和 4）年に平取町本町の沙流川の上流方向から下流方向に向かってドローンでの撮影を行いました。かつてバードがペンリウク翁のチセを訪れたときのコタンの通りは、家並みこそ様変わりしたものの、現在の本町を貫通する道道 80 号に引き継がれている様子がわかります。またかつてバードが見た沙流川左岸もほぼその当時の山並みのままとなっており、明治初期からの近代開拓以降のアイヌの人々の暮らしの跡が受け継がれ、その土台の上に平取町が発展してきたことを実感することができます。

写真３ 平取町本町上平取の街並みと沙流川・森林空間の景観（2022 年 11 月　ドローンにて撮影）

文化的景観とは、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法）という文化財です。平取町の重要文化的景観は「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」がそのテーマとなっており、「アイヌ文化の諸要素を現在に至るまでとどめながら、開拓期以降の農林業に伴う土地利用がその上に展開することによって多文化の重層としての様相を示している」ことに極めて重要な価値があるとされています。

バードが最初に訪れた佐瑠太は沙流川流域のアイヌ文化にふれるゲートウェイであり、バードが滞在したピラウトゥルコタンは沙流川流域のアイヌの伝統的な暮らしにふれるゲートウェイであり、その後は平取村の役場ができて近代化が進む地として近代開拓のゲートウェイであったと考えられ、さらに今後、アイヌ文化の知見を活かしながら未来に続く持続可能なまちづくりを展開するゲートウェイになることが期待されます。

# アイヌの人たちが営み続けてきた集落の今日的景観

吉原秀喜
平取町アイヌ施策推進課 課付学芸員

写真　細くのびる二風谷地区中程にある萱野茂二風谷アイヌ資料館の前景と所在地表示銘石（撮影：吉原）

上の写真２葉は、萱野茂二風谷アイヌ資料館の前景と正面入口近くに設置された銘石で、資料館所在地を表示しています。時に、資料館や萱野茂氏の自宅には、このアイヌ語を表書きした郵便物が届いたこともあったようです。北海道日高地方、平取地域における文化的景観の重要な特徴の一つは、アイヌ民族の系譜につながる人びとが、縄文期あるいはそれ以前の時代から暮らし、これからも営みを持続していくだろう今日的な村里や街区がそこにあるという点です。町内の二風谷地区がその最もわかりやすい事例だと言えます。

そこでは、例えば人びとの生活・生業の史的変遷については主に沙流川歴史館が、また「伝統文化」と称されることが多い近世・近代のアイヌ民族誌については主に平取町立二風谷アイヌ文化博物館が、それぞれ館内の資料展示や野外のチセ（復元家屋）群を通じて概要を知らせてくれます。現代の暮らしぶりについては、博物館、歴史館や復元家屋群のある「二風谷コタン」から、工芸伝承館「ウレシパ」を中継して萱野茂二風谷アイヌ資料館とを結ぶ「匠の道」を軸にしつつ、時に脇道にもそれて散歩すれば、そのあたりは現代のアイヌ民族系住民を中心に、和民族系その他の文化的背景を有する人びとが働いたり、学んだり、暮らしたりの場であり、その街区内の景観です。ただし、好奇や蔑視の眼差しで住居等をのぞき見するような態度での「観光」がありえないのは、もちろんです。

ここまでの文章から読者には、大まかに分類すると次のような二つのタイプの疑問が生じるかもしれません。一つは、現代になって「観光」のために形成されたところ以外に、アイヌの人たちが昔から集住していたムラがまだ北海道にあるのか、というタイプ。もう一つは、そうした村里や街区は北海道内の諸処に現にあるのであって二風谷だけが特別ではないはず、というタイプ。

回答は、意外と両タイプの疑問に対して共通しています。筆者なら大旨「そうなんです。けっこうあるんですよ。二風谷の特徴は、多くの住民の方々も行政の側もそのことをしっかり表明していることです」と伝えます。文化的景観の考え方に留意しながらつけ加えると、「いま見えているまさにこの風景が、アイヌの人たちが営み続けてきた現代の集落景観であ

り、すでに二風谷地区の一部エリアは重要文化的景観に選定されてもいます」となります。そこにはミュージアム群もあり、「アイヌ伝統文化の今日的継承」というミッション（目標理念）を掲げ、地域に根ざした運営が図られています。と深掘りする場合も。

いますぐにそれをめざすという話ではありませんが、世界遺産登録の評価の表現として、「顕著な普遍的価値」(OUV=Outstanding Universal Value) という概念があります。筆者は、自分たちのスキルアップを図るため、平取地域の OUV を強いて提示するとすれば、次のように言えるのではないかと仮にまとめ、機会があれば問いかけているところです。

「アイヌ民族の場合は、基盤となるコミュニティとその文化が、歴史的経緯の中で不本意な変化を強いられ、大きなダメージを受け続けたケースだ。そのダメージは、地震や気象異変などの自然災害を大きく上回るものだとも言え、「復興」が長期的課題となる。こうした場合、現段階では希有とも言える取組が行われている地域やコミュニティの価値を次のように積極的に評価し、持続的に支援すべきなのではないだろうか。

消滅の危機にあった先住民族文化の復興を着実に進め、現代的な再構築を図り、持続的に基盤を拡充させている地域的・民族的コミュニティがここにある。」*

とは言え、日本社会全体や北海道内の類似した地方自治体の現状を見渡すならば、あっという間にいわゆる「限界集落」になってしまう可能性さえある厳しい現実、社会状況が続いています。引き続き、気を引き締めていかねばなりませんね。

図　２１世紀前半期の平取町二風谷地区の立地環境概観（Google Earth より）

---

補注

＊吉原が国立民族学博物館や東京文化財研究所における研究会等の機会に発表してきた見解

**「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観　―牧野・牧野林の広がり―」**
**吉原秀喜 2007『月刊文化財』平成 19 年 9 月号 表紙解説の再掲（次ページとも）**

※第 4 次選定申出に向けた作業が進展している中で、ふりかえり・再確認の参考資料とする意図で、
　第 1 次選定直後の解説記事の一部をそのまま掲載していただいた。ただし、カラー写真はモノクロにした。

---

〔表紙解説〕

## アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観

### ―牧野・牧野林の広がり―

砂が流れる川である。北海道日高地方随一の長流、沙流川の名は、音の面ではアイヌ語サラ（sar）をもとに付けられた。湿原を意味する。シシリムカ（sisirmuka）という古名も伝わる。解釈すると、要は辺りが詰まることである。この場合、「辺り」が指すのは川が海に流れ込む付近で、土木の用語では「河口閉塞」だ。「詰まる」のは、たくさんの砂が流れるからである。流域の地質的特性から洪水時の土砂量がすさまじい。つまるところ、アイヌ語の発音、漢字の読み、和語（日本語）の意味、そして川の実相が混成した含蓄ある表記が「沙流」だ。この成り立ちの文脈は景観にも通じる。

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が重要文化的景観として選定された。「アイヌ文化の諸要素を現在に至るまでとどめながら、開拓期以降の農林業に伴う土地利用がその上に展開することによって多文化の重層としての様相を示す極めて貴重な文化的景観」（文化庁発表資料）という評価に基づく。文化のフィルターを通すと、景観も混成していると言える。

北海道内で初めての選定であり、全国的にも三番目となる。選定範囲は、国有林・町有林を主体とする森林域と国・道が管理する河川域で、総面積は約四三八一ヘクタールと広大だ。①落葉広葉樹林・針広混交林を主とした自然植生が基盤である。②先住民族であるアイヌの伝統が基層にあり、今につながっている。③これらに近代以降における開拓の営為が重層し、混成した多文化性・多民族性を包含している。自然、歴史、文化の観点から概括したこうした諸特性は、日高地方の景観としての典型性、全国的あるいは世界的な視野で見た場合の顕著な固有性を示すものだ。

表紙写真は、沙流川の支流、額平川の水系、宿主別に広がる選定区域の俯瞰である。この一帯は、牧野・牧野林の特徴をよく示す地区である。数段の階層になった河岸段丘の平坦面は牧草地として拓かれ、現在では「びらとり和牛」の肥育に利用されている。主に段丘斜面の、自然林が帯状に残されて形成された牧野林とともに、大がかりな段畑状の光景を呈する。川筋には遺跡や祈りの対象となってきた場所が多く並ぶ。写真の中程には、野生スズランとしては日本一の群生地が広がる。野生とはいえ、もともと生育適地だったことに加え、放牧された牛馬が有毒成分を含むスズランを食べ残すので、繁茂が促進された結果である。

詳しい理解のためには当地への来訪をお願いするが、掲載写真に即して一言だけ付け加えると、アイヌの人たちもまた牧野・牧野林の形成、管理に深く関与してきたし、生産された和牛を食しもするのはもちろんだ。「近代開拓」は、アイヌ民族の生活・生業様態を大きく変容させ、異質な景観を創出した。しかし、景観の上書きは、斉一で隙間のないものではなかった。幸いにして。

（平取町立二風谷アイヌ文化博物館学芸員・吉原秀喜）

（写真提供・株式会社建設維持管理センター）

### お詫びと訂正

『月刊文化財』八月号において、写真提供のクレジットが不足しておりました。謹んでお詫びするとともに、左記のとおり訂正いたします。

二ページ（口絵解説）
写真提供・福岡市埋蔵文化財センター

四六ページ
写真提供・島根県教育庁

◎次号は歴史資料部門三〇年の特集です。

◎『月刊文化財』の購読については左記にて承ります。

＊電　話／0120・203・696

＊FAX／0120・203・974

※購読のお申し込みでいただいたご住所やお名前などは、企画の参考など本誌にかかわる目的にのみ利用し、他の目的では使用いたしません。

月刊　文化財　九月号（五二八号）
平成十九年九月一日発行
定価七三四円（本体六九九円）
（送料八四円）
監　修　文化庁文化財部
発行所　第一法規株式会社
〒一〇七―〇〇五二　東京都港区南青山二―一一―一七
☎〇三―三四〇四―二三五一（大代表）
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

**表紙・裏表紙の水彩画《沙流川、夏至の時のオプシヌプリの風景》**
**作：篠原 修**

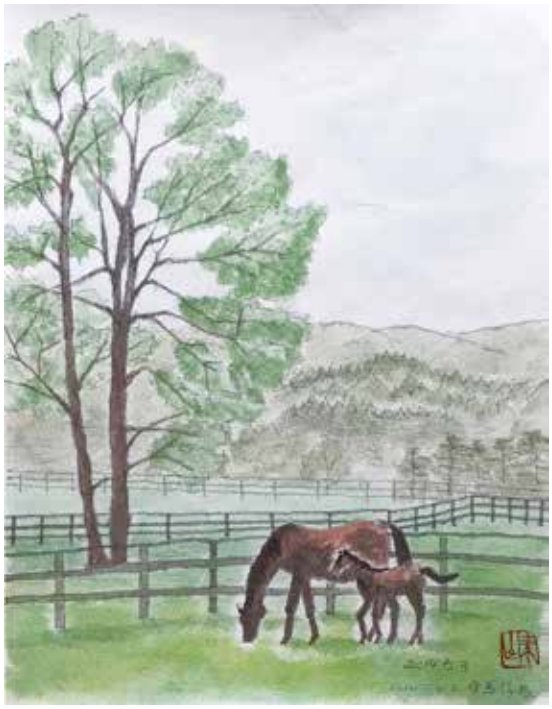
---

オプシヌプリは穴あき岩を意味するアイヌ語。沙流川の右岸、二風谷集落上手の対岸に位置する。かつて、日高山脈をはさんだ十勝側のアイヌ集団と争いがあった時に、技くらべと弁論で問題を解決したという口碑が伝わる。技くらべで、地元の神的勇者（オキクルミカムイと伝わる）が射た矢が岩山を貫いたらしい。用いたのは槍だという伝説もある。明治期には尾根筋の上部もつながっていて実際に「穴あき」だったらしい。

近年では、毎年６月の夏至前後の時期、対岸から望むと、太陽が沈むときにこの穴にスッポリおさまり、夕陽の光具合いが変化する現象が観られるというので、たくさんの人が集まるようになった。新しい伝承であり、それを活かした文化観光とも言える。

この絵の制作者は篠原修氏。東京大学名誉教授で、日本の景観工学を切り拓いてきた人。東京駅前広場や、駅から皇居に通じる街路、行幸通りの整備設計の監修者でもある。「二風谷コタン」再整備についても同様で、平取町文化的景観保全委員会の委員長も務めている。落款（らっかん）にある雅号「素山」（そざん）は「研究も素人（しろうと）、デザインも素人、絵も素人ゆえのネーミング」（ご本人）とのこと。下記で紹介している２作品とともに、平取町での仕事の合間をぬって描かれたものを３点ご提供いただいた。

［吉原記］



《民宿喜楽屋脇の牧場》

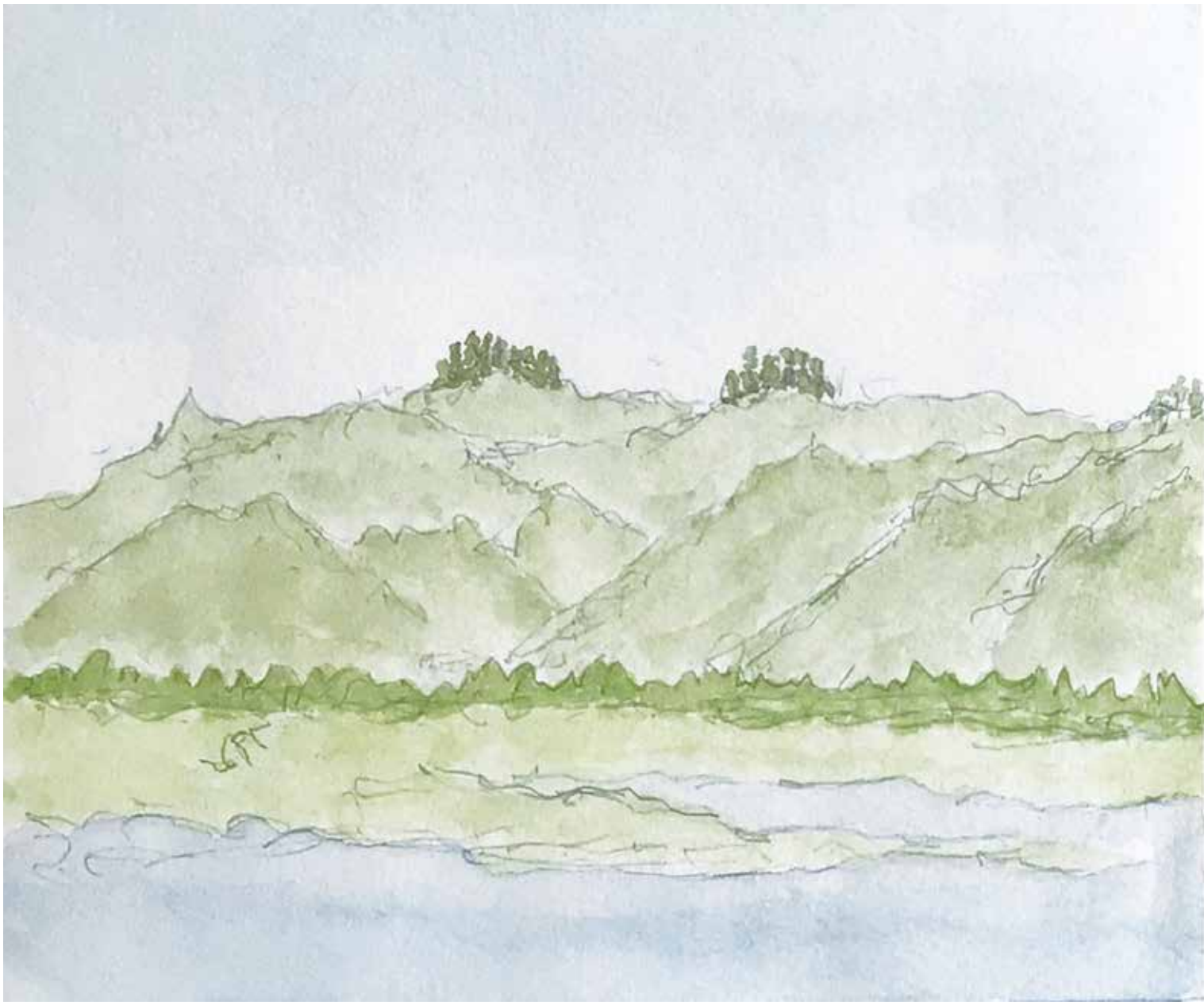
《平取のニシキギ》

---

アイヌの伝統を基層にした多文化な景観
― 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集 ―

2024 年 3 月 29 日　発行

発　行：　平取町・北海道大学観光学高等研究センター
編　集：　平取町アイヌ施策推進課・北海道大学観光学高等研究センター



水彩画｜沙流川、夏至の時のオプシヌプリの風景（篠原修）